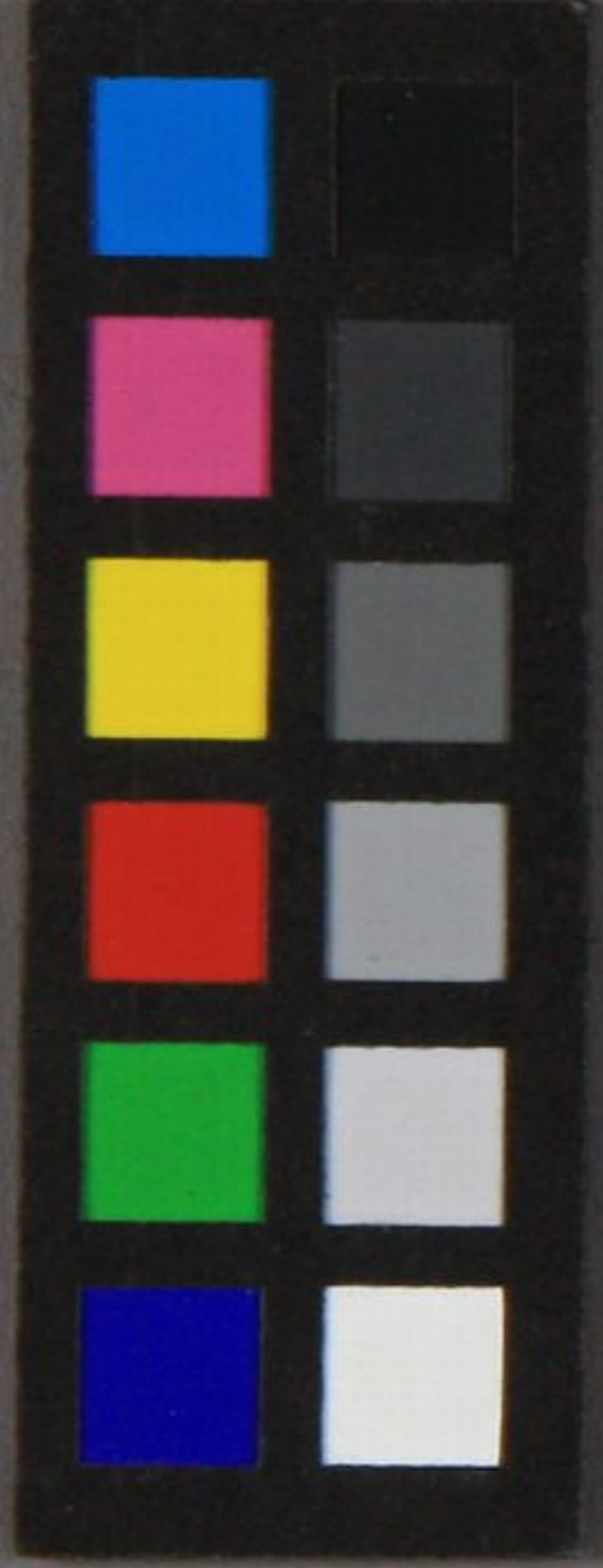


山 海 經



川 田 順 著



山海經

川田順歌集



山 海 經



川 田 順 著

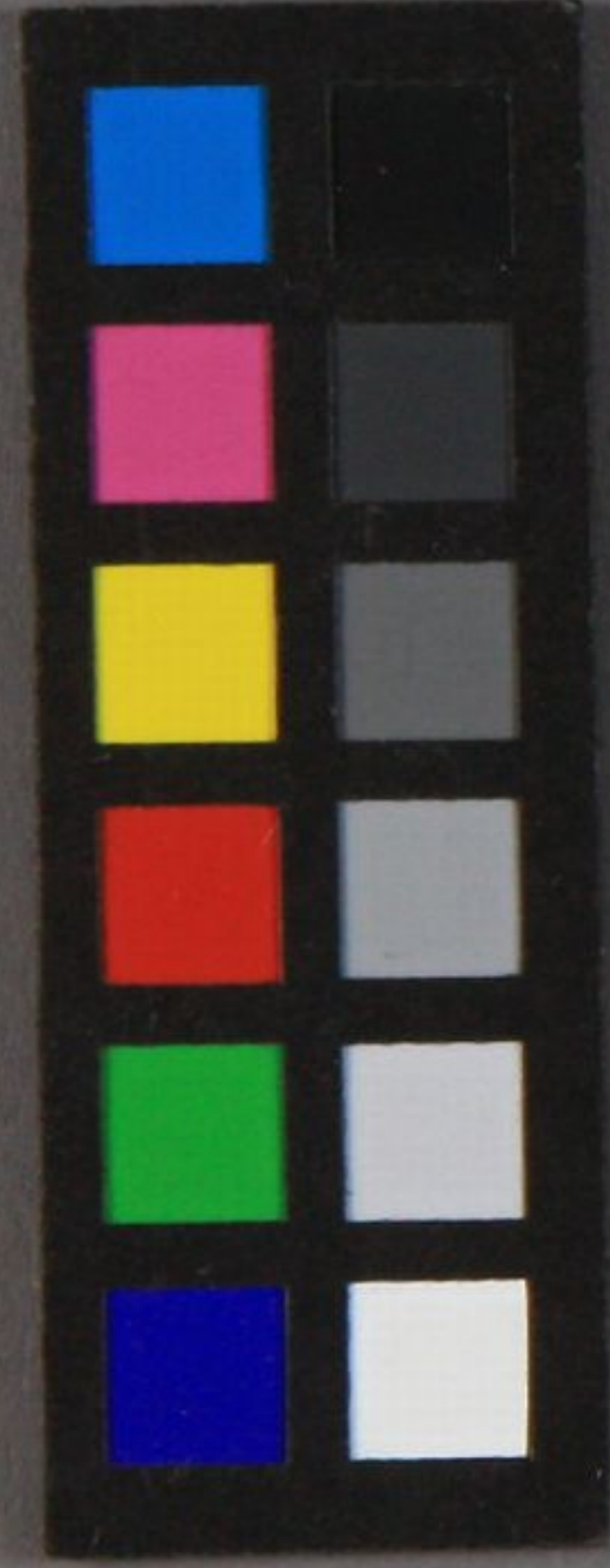
山  
海  
經

川  
田  
順  
歌  
集

Handwritten notes in Japanese characters, including a small drawing of a bird or dragon-like creature at the top. The text is faint and partially obscured by the book's binding.



山海經



山海經

川田順歌集









秋集  
山海經

川田順著

船川未乾裝幀

東雲堂出版

山海經目次

卷之一

佛像修繕……………	一
佐保秋篠の寺々……………	六
草深島……………	一三
法隆寺その他……………	一七

斑猫と曼珠沙華	二四
寂光院へ	三三
雪後の石山	三六
卷之二	
磧の烈日	四三
峽のゆふべ	四八
紀州行船中	五三

濁流	六〇
蟆子と百日紅	六四
天の橋立	七三
京都附近	八二
伊豆海岸	八九
真晝野	一〇〇
平泉懷古	一〇四

うつほ草と南蠻鳥……………一〇六  
海豚の群……………一二四  
北見まで……………一二九  
卷之三  
椿と牡丹……………一三九  
病軀……………一三四  
梅雨のあとさき……………一四七

天神祭……………一五六  
稚き甥の死……………一六四  
墓まゐり……………一六八  
公園の夏……………一七三  
暴風……………一八〇

山海經

川田順

卷之一

山  
東  
縣  
川  
田  
縣

佛像修繕

唐招提寺の講堂にて

かたすみ<sup>かたすみ</sup>の壁<sup>かべ</sup>によせかけならべたる盤<sup>の</sup>  
穂<sup>ほ</sup>先<sup>さき</sup>の<sup>の</sup>に<sup>に</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>く<sup>く</sup>光<sup>ひかり</sup>る<sup>る</sup>も

匠等たくみらは春はるのゆふべの床ゆかの上へにあぐらるた黙ま  
りはたらけるかも

いにしへの大おほき匠たくみは知らねども今いまのたく  
みをまなかひにうれし

くろぐろと佛ほとけまろべり薄うすき日ひのただよふ  
床ゆかのむしろの上へに

むしろの上へくろぐろと佛ほとけまろび居をり手て足あし  
のもげし佛ほとけもあるも



この佛おもき臉のめぐしもよわれ顔よせ  
てうつつに見たり

仕事場の幕かいくぐり出でて來り小暗さ  
床を一人し歩む

匠等は仕事着のまゝ出でゆけり春の夕日  
のあかるさ外の面に

佐保秋篠の寺々

七月三十日寧樂の寺めぐりすとて  
先づ佐保の興福院に賽す

きだはしに草履が一そく脱ぎてあり誰そ  
居るらむと思へど音せず

縁にゐて南を見れば青田中この寺に来る  
道の白しも

驟雨來

もうもうと吹き降りにあめは霧になりて  
青田の面の低處を飛べり

庵主日野西徳寶尼と語る

尼寺のひるげによばれ箸とれば萬兩の實  
が縁ささに紅し

佐保山

國見すとのぼればこれの低山も目路ひら  
けたりあはれ佐保山

岡のべの梨畑を來ればはた、神遠くに震  
ひ暑しこの日は

不退寺の本堂に憩ひて

いかづちの遠とどろきはをやみ無しこゝ  
の廣縁ふるふがにおぼゆ

山にかもこだまはするや遠方の晝がみな  
りのつぎてしきこゆ

海龍王寺

ふる寺の牆内草原樹を疎みあからさまに  
も夕日は照りたり

秋篠寺

あさしの南大門の樹の下は蛇も棲むが  
に草しげりたり

ぬばたまの夜の暗さのみ深くなる寺の庭  
なれど去りがてぬかも

くらき夜の<sup>よ</sup>大寺<sup>おほてら</sup>を我が出<sup>い</sup>でくれば<sup>あさみ</sup>薊<sup>あざみ</sup>の花<sup>はな</sup>  
に<sup>いな</sup>稻妻<sup>いなづま</sup>のしつ

草  
深  
島

二百二十日新薬師寺へ

この吹<sup>か</sup>き方<sup>かた</sup>野<sup>の</sup>分<sup>わ</sup>にしてはなまやさしされ  
どもひれふす<sup>けい</sup>鶏頭<sup>けいとう</sup>の花<sup>はな</sup>は

青丹よし奈良の田舎に秋きたれり梨棚の  
下の鶏頭の花

右ひだりくづれ築地のつづく道築地のな  
かは草ふか畠

吹きつゝのる風空の下大寺の萱の反りのし  
づけくは見ゆ

真しら壁きはやかに日がさし來り雲ぎれ  
みゆるあらし空かも

ふみ入ればくされたる柿の臭ひする築地の裏の草ふか島

ふみ入りし草深ばたけ大寺の裏壁みえて  
さぶしきものを

法隆寺その他

法隆寺門前

をちこちの梨棚の上にある鴉目につきて  
野はとの曇りせり

晩<sup>おそ</sup>稲<sup>て</sup>田<sup>た</sup>のみりの穂<sup>ほ</sup>の上<sup>へ</sup>雨<sup>あめ</sup>けぶり斑<sup>い</sup>鳩<sup>か</sup>寺<sup>てら</sup>  
の築<sup>つ</sup>地<sup>ち</sup>の長<sup>なが</sup>さ

五重塔泣佛

頭<sup>あたま</sup>おさへ悶<sup>もた</sup>え泣<sup>な</sup>する佛<sup>ほとけ</sup>あれば大<sup>おほ</sup>聲<sup>こゑ</sup>あげて  
泣<sup>な</sup>く佛<sup>ほとけ</sup>あり

いかるがの泣<sup>な</sup>佛<sup>ほとけ</sup>たら泣<sup>な</sup>き悶<sup>もた</sup>えこらへかね  
たるその聲<sup>こゑ</sup>きこゆ

初秋の夜長谷寺に詣づ

こもりくの豊<sup>とよ</sup>初<sup>はつ</sup>瀬<sup>せ</sup>寺<sup>てら</sup>まうのぼるこの小<sup>こ</sup>夜<sup>よ</sup>  
更<sup>よ</sup>けを川<sup>かは</sup>音<sup>と</sup>高<sup>たか</sup>しも



きだはしを上り佇み見入るればふけ沈み  
たり御寺の牆内

廻廊のくらし奥處ゆ下りて來る人の足音  
しつこの夜深しも

あしびきの山の夜ふけをまさやかに岩つ  
たふ清水したゝるきこゆ

當麻に遊ぶ、曼陀羅堂

曼陀羅の厨子のとびらのくらけれど一面  
の螺鈿ほのぼのと見ゆ

塔下に立ちて

あふぎみる庇々の重なり  
のしづけきかも  
よ空の深さに

宿坊に眼鏡かけたる娘  
ゐて鶏頭の葉のし  
みじみ紅し

山もとの當麻の村のゆふけ  
ぶり野道をゆく  
にいつまでも見ゆ

養魚池の番小屋に灯のく  
らければその上の道を  
われは急ぎつ

斑猫と曼珠沙華

皇極帝勅願所河合寺

ほそぼそしさくら紅葉の下道のゆきつく  
るところ樽階はある

草深の樽階を一人ふみつゝもこの上に寺  
のありと思はず

あしびきの片山かげの古寺に草刈がはひ  
り草刈り居るも

観心寺途上

曼珠沙華こゝに群れ咲けりかしこにも更に數多くかたまりて見ゆ

崖下のはるか深みの木のくれの赤くし見ゆれまんじゆしやげの花に

むかう山の棚田のあせの曼珠沙華ただに目につきこの道さびし

斑猫の飛びてはとまる石のうへかんかんと秋の眞日照りやまず

はんめうは青きそびらを光らせてこゝだ  
くとまる日向の石に

曼珠沙華に斑猫の飛ぶ眞つ晝間つくづく  
と坂を登りけるかも

観心寺門前の茶店に憩ひて  
なほ奥へかよふ一すぢの道ありて人とほ  
り居りこの寺の前を

後村上天皇檜尾陵

山の上のみさゝぎの邊にいほりせるみさ  
さぎ守は一人なるかも

石だたみ我等下りゆくうしろよりみさゝ  
ぎ守も下り来る音す

古市

百姓家の土間をつらぬきて夕づく日この  
道の上に赤く照りたり

古市のまちを出づれば稲の上を真たひら  
に來るゆふ日の光

しめれる月夜の風にほのかにも稔りの前  
の稲が香へり

大和川の大橋の上にて

渡り来るものいまだはさやに見えねども  
こゝの欄干の揺るゝを覺ゆ

寂光院へ

修學院村より山路にかかりて

むかう岸に躑躅咲き居り目づたへば遙か  
の上の高みにも咲く

ふすま引けばすぐ庭さきに咲き照れる石  
楠樹の花の大きむら花

縁側の大き柱のひびわれに蜂のうなりの  
こもるを聞きつ

寺庭のひかげのかづらつめたきに屈まり  
て手をふれにけるかも

けだるく我が歩む時を初夏のあらゆる花  
の日にほてり居り



寂光院じやくくわうかんのうしろに登のぼる道みちはあれど落椿おちつばきく  
ろくくされてゐたり

建禮門院の御陵を拜す、老いたる廟丁と語りて

大原おほはらの三みつつの御陵みづらを一人ひとりして守まもると言いは  
ずやもこの御陵みづら守もり

雪後の石山

今朝けさの雪ゆきはやも残のこらね大寺おほしやの石敷いしじきはぬれ  
てすがしくもあるか

のぼりきりしきだはしの上の寺庭に見の  
めづらしく残る雪かも

寺庭のすこしばかりの雪の上にふき渦ま  
さし風のあと見ゆ

大屋根のこの面は雪のさえぬれば晝ふか  
き日のかがよひけぶる

雪をはく箒の音のさらさらとさやにしき  
こゆ庭の奥處に

この庭の冬木のなかに椿あり一重のくれ  
なる大きく咲き居り

ころもでの田上山を初めて見つ雪はだら  
なる川をちの山

みあかしの光のまはりいさゝかの明るみ  
居つゝものは見えずも

外の面よりほのに夕日のさし入れば柱々  
は片明りせり

卷之二

積の烈日

久邇京の址をとぶらひつゝ木津川  
に沿ひて上る、晩夏灼熱の日なり

木津川の川邊の道の隈も  
おちず照り光り  
つゝはるけかりけり

水踏めば水なまぬるし日ざかりの磧をゆ  
くにせんすべ知らず

日ざかりを鳶が鳴くこゑ川下の磧の空に  
はるかなるかも

木津川の河原竹藪ゆふ日せり砂のほてり  
に堪へつゝ歩む

木津川の磧の道のゆふづきて赤き日われ  
を照り竦めつも

うつむきて我が歩み來し川床の砂の上なる子供の足跡

うすぐらき藪かげの道をすれちがひ夜釣の男いそぎけるかも

暮れはてゝ夜空に入れど一すぢの紅き雲あり川に映れる

ふるさとの久邇の山田の稻莖にともしく光る螢を我が見つ

峽のゆふべ

貴船神社の境内にて

我より物言ひかけねば祝人は何も言はず  
して下りて行きけり

むかつをの高みの松に照れる日のやうや  
く赤しやゝに日の暮れて

上の山のはるか高みに夕日ありいかにも  
深き迫間なるかも



深谿ふかたにの川かはの瀬せの音ねたそがれのしじまに壓おさ  
され細こまくさやけし

下くだりてゆきし祝人いわりとは又またしばらくして歸かへり  
きたれり夕暮ゆふぐれ深ふかし

山やまには今いま残のこらぬ夕日ゆふひなかぞらの雲くもの一ひとひ  
らにほの映うつろへり

かい屈かかみ憩いひて久ひさしをぐらくも祠ほくらの庭にはの  
ひた土つちは見みゆ

紀州行船中

舊友脇村文學士の田邊に住めるを訪ふとて七年八月某日新  
和歌浦より乗船す

ふなばたの浪の穂さきの蒼白くくづれ光  
るが暮れたれど見ゆ

くもり夜の遠稻妻のほのめきを船の欄干  
に居凭りさびしむ

海のはて赤くにじませくもり夜の七日の  
月の落ちゆくところ

暗闇を解ちかよりてこの船と呼びいらへ  
する聲さやかに

遠方の廻轉燈が動きつゝ大きく向け來る  
その光はや

我が船に岬の崖のそばだちのあまり近  
ばいや高く見ゆ

み熊野の日の岬をし越ゆるほど少し揺り  
たれこの夜らのよさ

わたつみの沖くろぐろともりあがり夜空  
の雲のはてなきかなや

この次の港に着かば降りぬべみ暗き部屋  
にし眠らでぞ居る

くもり夜の濤ただ暗し港ぐちの紅き竿燈  
ふけにけるかな

孟蘭盆の夜扇が濱にて

ほの明み掌をあはす人の影は見ゆ砂に立  
てたる櫓も見ゆれ

燒き棄つる魂棚の器具うら悲しその火の  
そばをわれは歸るも

湯崎に遊ぶ

御船崎湯崎をかけて我が歩む白良の濱の  
朝の砂はも

潮騒の岬の脚の石の上をずぶぬれにぬれ  
て湯にゆく我は

濁流

初秋暴雨の後犬山城の天主に登る

高<sup>たか</sup>やぐらくらき梯子<sup>はし</sup>を攀<sup>よ</sup>ぢたれば真<sup>ま</sup>下<sup>した</sup>の  
川<sup>かは</sup>の赤濁<sup>あかどろ</sup>り見<sup>み</sup>ゆ

木曾川を下りて

目<sup>め</sup>には見<sup>み</sup>る赤濁<sup>あかどろ</sup>り浪舟<sup>なみのね</sup>の中<sup>なか</sup>ひた照<sup>て</sup>る真<sup>ま</sup>日<sup>ひ</sup>  
に照<sup>て</sup>りさらされつ

川<sup>かは</sup>底<sup>そこ</sup>をまろぶ石<sup>いし</sup>の音<sup>ね</sup>寒<sup>さむ</sup>けかり今<sup>いま</sup>は耳<sup>みみ</sup>には  
そればかりきこゆ

笠松

堤町無花果の實はまだ青し秋繭どきのあ  
つき日が照る

めづらしみ見上げてゆくも繭棚をつれる  
二階は皆あけ放つ

繭の競りをたちどまりしばし見つるほど  
全く夕日の落ちにけるかな

大河をまたび見むと町はての堤に上る  
ゆふべ暗きに

蟆子と百日紅

九月はじめ余吾湖を見んとて先づ長濱に來り宿す

軒さきの百日紅の花にい照る日の暑苦し  
ければ日覆おろす

旅籠屋のきたなき風呂にはひりたりさる  
すべりに日の照りつくる時

街ゆくに朝から暑し伊吹嶺のこの面のな  
だり雲蒸せる見ゆ



琵琶湖の岸に出つ、荒模様なり

長濱を出でし汽船のゆれ動きいまだ幾ら  
もい行かざる見ゆ

中之郷といへる停車場にて

晝深きこの山あひの驛には湖を見にゆく  
われ等のみ下りつ

余吾湖途上

道のべはうすら赤らむ棗の實ひくさしげ  
りの桃林かも

ここまでと俣を下りて徒行けば草深道の  
鶏頭の花

村童に逢ふ

掌を開けて翡翠のむくろ見せたれどつば  
らにも見ず我は行きにけり

蟆子のゐる湖べの草地ふみゆけばいまだ  
はげしき暑さなりけり

藻刈舟に乗りて

うづだから藻を積みし舟の片端に乗りて  
越ゆれば湖の暑さかな

この痒き蟆子ちふ虫の何處ゆか舟にさへ  
来て居りがてぬかも

夕川<sup>ゆふがは</sup>を榜<sup>こ</sup>ぎたみ歸<sup>かへ</sup>る藻刈<sup>もかり</sup>舟<sup>ふね</sup>うづだかさ藻<sup>も</sup>  
の水<sup>みづ</sup>泥<sup>どろ</sup>を垂<sup>た</sup>らす

湖畔<sup>こほりべ</sup>の尼寺<sup>にじ</sup>に休<sup>やす</sup>みて日没<sup>ひぼく</sup>を待<sup>まち</sup>つ

丘<sup>かみ</sup>の上<sup>うへ</sup>の尼寺<sup>にじ</sup>の庭<sup>にわ</sup>の赤土<sup>あかつち</sup>に夕日<sup>ゆふひ</sup>燃<sup>も</sup>えつゝ  
ぶとのより來<sup>く</sup>も

暑<sup>あつ</sup>苦しき讀<sup>よ</sup>經<sup>ぎやう</sup>の聲<sup>こゑ</sup>をさきつつも蟻<sup>あなご</sup>子をこ  
ろしてゐたりけるかも

あまでらの縁<sup>えん</sup>の障子<sup>しょうじ</sup>にいつばいに西日<sup>せいひ</sup>照<sup>て</sup>  
りつけ居<sup>ゐ</sup>どころあらず

尼寺あまてらのさるすべりの花はなひとりあかくまは  
りの山やまは暮深くれふかむなり

暮深くれふかみ藻刈もかり舟ふねいまはつぎつぎに川かはに榜こぎ  
いりかへりたるらむ

天の橋立

夏日午後新舞鶴港を出づ

青波あおなみに浸ひたれる纜ともづなたぐり上げたぐり上げて  
は大き輪おほいに巻まく

宮津に宿る、夜舟して橋立に行く

はしだてに月夜に渡りわが折りし磯松が  
根のなでしこの花

松の影はだらに落つる橋立の洲中の道の  
よき月夜かも

あくる朝再び舟して行く

はしたての江尻の村は海越しに見らく遠  
けど朝煙見ゆ

岬と岬のあひだの沖一すぢ外海にしてひ  
たすら青し

切戸より阿曾の海に入る

江の口に張りきり網を張りてあれどかま  
はず通るその上を榜ぎて

さしいでの長洲の岸の草中に舟より見ゆ  
る萱草の花

橋立の洲に上りて

橋立の洲中の道は松の幹かさなりあひて  
奥處しらずも

松の中夏草のしげり高くして阿曾の入江  
を見がてにするも

成相山

みちばたの筵ひしろの鯉魚いわし日にひかり暑あつかりけ  
ればいそぐ山やま駕籠かご

鶴はいたかのしき鳴なくききつ橋立はしだての真まうへの山やまを  
のぼりて深ふかし

谷たに一いちめん照てり光ひかる日ひの日ひざかりにとほり  
てひびく鷹たかの聲こゑかも

谷底たにそこのすくすく立ちたの杉木すぎ群むらみあろせば  
目にめいたくせまるも

宮津の海岸を歩いて

夜釣人ひそやかなれや我はも話しかけむ  
としたれど止めつ

倉庫のかげつたひてゆけば夜釣人ここに  
も暗くかい屈み居り

砂濱の網干す柱うすぐろくかぎりなく立  
てり夜空は曇り



京都附近

清瀧の歸るさ

峠<sup>たがひ</sup>みち夏<sup>なつ</sup>山<sup>やま</sup>あらしふくなべに清瀧<sup>きよたき</sup>川<sup>がは</sup>はき  
こえずなりぬ

暮<sup>くれ</sup>深<sup>ふか</sup>み又<sup>また</sup>あはめやと思<sup>おも</sup>ひつる愛<sup>あ</sup>宕<sup>た</sup>まゐり  
にあひにけるかも

光悦寺途上

夏<sup>なつ</sup>野<sup>の</sup>ゆく俣<sup>くま</sup>の上<sup>うへ</sup>に目<sup>め</sup>をつぶりさけばほの  
かに雲<sup>ひばり</sup>雀<sup>は</sup>は鳴<sup>な</sup>くも

柿<sup>かき</sup>わか葉<sup>は</sup>島<sup>はなげ</sup>のみちを北<sup>きた</sup>山<sup>やま</sup>にややになだら  
にゆきのぼりつつ

賀茂川のほとりにて

日<sup>ひ</sup>は暮<sup>く</sup>れついつのまにかも知<sup>し</sup>らぬ間<sup>ま</sup>に向<sup>むか</sup>  
うの寺<sup>てら</sup>の門<sup>かど</sup>は閉<sup>と</sup>ぢたり

はつ夏<sup>なつ</sup>の賀<sup>か</sup>茂<sup>も</sup>の川<sup>かは</sup>瀬<sup>せ</sup>のよるの水<sup>みづ</sup>低<sup>ひく</sup>きるせ  
きを光<sup>ひか</sup>りて流<sup>なが</sup>る

くもり夜<sup>よ</sup>のくろき柳<sup>やなぎ</sup>の樹<sup>き</sup>々<sup>々</sup>の間<sup>ま</sup>に砂<sup>すな</sup>ばか  
りなる川<sup>かは</sup>床<sup>とこ</sup>の見<sup>み</sup>ゆ

橋はしばしら黒くろくぞ並なみ立たつ夜よの水みづはかそけ  
き音おとしさやりて流ながる

瀬田川に遊ぶ

夕ゆふ川かはの小せ舟ふねにゐつつ山やま下したの我わが來こし道みちを  
めづらかに見みたり

をちかたの蜺しじみ取とり舟ふねふなぞこに蜺しじみをこぼ  
す音おとのきこゆる

障しやうじ子こあけて女おんならは内うちにはひりたり欄てすり干りの  
したの水みづ暮くれれはてつ

この部屋へやの燈あかりによりし蟲むしおびただしく掃は  
きよせられたり朝あさの廊下ちやうかに

向むかう山やまの雌松めまつの幹みきはみゆれども朝あさの雨あま霽あや  
いよいよ深ふかし

伊豆海岸

長津呂

うすぐらき海うみの入いり込みこみの斷崖きりがしにしじに  
這はひたる岩いは松まつのみどり

うすぐらき海の入り込みの岩壁にひきた  
る潮の痕は見ゆるも

長津呂の入江の遊び寒くなり日のあたる  
岸を榜がせてを行く

石廊崎

岩の面に眞つすぐにつけし道のあり榜ぎ  
ちかよりてあふぐ石廊崎

岩の上にたちて見さくる海一めんまぶし  
き眞日の光り波かも

岩いはの上うへを今いま來こし道みちのけはしけどまことこ  
の外ほかに來くる道みちあらず

岩いは群ぐんのはざまはざまにみだれ入り白しろ泡あわと  
なるうしほ波なみかも

くろぐるとゆふべの海うみに突つきいでしこれ  
の岬みさきは一つの大おほ岩いは

をちかたの岬みさきの脚あしにけふる波なみいよいよ白しろ  
し夕ゆふかたまけて

下田より熱海へ行く船中にて

おほらかに秋の海原にかたぶける天城の  
嶽は見えのよろしも

岬をまはれば海はさらに青し天城の嶽の  
真下に來れり

山みれば天城のうへに海みれば大島の上  
に壘まる白雲

舟の上に魚見櫓を立てしかば間なく時な  
く大きく揺れ居り

磯村は砂のうへにも屋の上にも松の枝に  
も網干せり見ゆ

ひろげたる帆布の上に五六人あぐらゐて  
縫ふ太針の光

伊東碇泊中觸目三首

眼をおとし船の欄干ゆ見つつ居り鮫のあ  
たまの疵口の赤さ

船口にわたす板の上ひきずられ鮫のから  
だの大きかりけり



尾長だよそらも一つ尾長だよ引きずり  
入るる大き鱒鮫

網代

船の旅の夜に入りて更にさびしもよこ  
の港も降るる人ばかり

夜の山の高み低みに灯をともし温泉の町  
に我が船近づく

熱海

眞晝野

三月某日武藏野の狭山が岡にて

武藏野の丘の土原うらうらと照れる春日  
に疲れて歩む

むさし野の小手指村の村役場紅梅もゆる  
眞晝なりけり

山あらぬ武藏野の原をゆきゆきてここに  
來ぬれば山の間近き

ちちのみの秩父群峰の山の秀は雪に尖れ  
り櫟の上くわくに

見上みあぐらくけやきの木立こだちささぼそに枝えだわ  
かれしていや細ほそき枝えだ

雲雀ひばりが鳴くこの野つばらの日の光ひかりあはれ  
何處どこかに雲雀ひばりが鳴くも

平泉懷古

中尊寺

光堂とぼそ開けたり夏の日の烈しきひかりただに入りつも

毛越寺廢墟

毛越寺は何もかも無し大野火の焼き亡ぼせるその日のままに

この野べの幾處にか煙立て菜種殻焚く烈しき日ざかり

うつほ草と南蠻鳥

陸前國砥澤鐵山途上

みちのくの川渡の湯の前河原あかさき月夜  
を一人し歩む

旅人は馬の上よりのぞきゆく大鍋つりて  
爾煮るところ

鐵山に數日滞在して

時鳥しじには鳴けどさびしと思はね南蠻  
どりの鳴くはさびしも

南蠻鳥なくはさびしも前山の木天蓼の葉  
のしろき夕ぐれ

昨日のごと南蠻鳥をさかまくはさびしと  
思ふに朝から鳴くも

鑛山の南蠻鳥のさびしき聲ここにゐる間  
はさかねばならず

陸中國大萱生金山

谷のみち青き實をもつ胡桃の木胡桃の下  
の馬頭觀世音

むらさきに花うつほ草い照りたれ鑛山道の  
荒草の原

うつほ草咲き照る眞日の草原にうづたか  
く積む山の捨石

坑内

支柱につくしろき木菌のむらがりにあか  
りを上げて見つつさぶしも

くらやみの斜坑の底に燈は見ゆれあの處  
まで下りんとするか

岩肌の照りかそけきをまもりつつ外の光  
に近づけり今は

うつぼ草見むとはしつれ坑外に出でし  
まゆらただにまぶしき

しみじみと花うつぼ草の草の上に息づく  
かもよ外の光に

驟雨

あしびきの山の雨うつ草中に立ちぬれて  
馬は嘶きにけり



海豚の群

津輕海峡船中

我が船をさほひ追ひ來るゝいるかの群ほど  
へて見ればなほし追ひ來る

波の上に躍りあがり落つる海豚の群そこ  
にもここにも飛沫をあげつ

いるか飛ぶ眞夏の海の光り波まんまんと  
して我をめぐれり

我が船の邊津波くぐる海豚の腹波を透き  
ては青く光るも

青波を大きな海豚のくぐる見つ欄干につか  
まり真下を我が見る

い群れては浪の秀の上に躍りあがる海豚  
の腹の白く光りつも

波の上をかけらふ海豚専念なり頭そろへ  
ていかけらふ見ゆ

ひろびろと波こそ光れ目かげして海豚の  
群をなほも見むとす

津軽の海やませの風のふきつくる汐げに  
まむかひ我が眼痛し

北見まで

七月北海道に渡る、大沼にて

火の山のくづれ尖りしいただきをまとも  
に仰ぐ古沼のほとり

なだりゆきすなはち海に續くらし駒が嶽  
の裾彼方に長し

夕さればこの古沼に波立たせ噴火灣の  
かせひようひようと來る

火の山のふもと木原の檜林みどりは暗く  
しづみたるかも

火の山に夕日なほあり目の前の骨蓬の花  
暗くなりつも

札 幌  
たもの樹が大きくしげる夏かげの札幌の  
街にわれは來れり

北見國某金山途上

煙出しをいづれの小屋も持ちたればこゝ  
の荒野の冬が眼に見ゆ

山だひら亞麻の島のさぶしもよ焼木の株  
がとびとびにある

深谷へかたぶき下る山だひら露の葉のな  
かに道ありにけり

この道の落の葉のしげりふかぶかと焼木の  
群の根方をかくす

たち枯れの焼木の群のしらじらと暮れ残  
る山を急ぐなりけり

天鹽岳に雲沈み來る日のくれを北見の國  
の鑛山に居り

オホーツク海のほとりにて

山獨活のあらし茂りの花の中人さへ馬さ  
へかくれて行くも

奥<sup>おく</sup>蝦<sup>え</sup>夷<sup>で</sup>の北<sup>きた</sup>見<sup>み</sup>の海<sup>うみ</sup>し見<sup>み</sup>え來<sup>く</sup>るか山<sup>やま</sup>獨<sup>う</sup>活<sup>ど</sup>の  
花<sup>はな</sup>のむかうの濃<sup>こみどり</sup>綠

濱<sup>はま</sup>川<sup>かは</sup>にうぐひ釣<sup>つ</sup>る子<sup>こ</sup>のうしろには照<sup>て</sup>りつ  
く真<sup>ま</sup>日<sup>ひ</sup>の貝<sup>かひ</sup>殻<sup>がら</sup>の山<sup>やま</sup>

ここにしてほとほと見<sup>み</sup>えぬ遠<sup>とほ</sup>沖<sup>おき</sup>に帆<sup>は</sup>立<sup>たて</sup>貝<sup>がら</sup>  
捕<sup>と</sup>る舟<sup>ふね</sup>は出<sup>い</sup>でたり

荒<sup>あら</sup>濱<sup>はま</sup>をゆきとどまらぬ我<sup>わ</sup>が歩<sup>あゆ</sup>み山<sup>やま</sup>獨<sup>う</sup>活<sup>ど</sup>の  
花<sup>はな</sup>の茂<sup>しげ</sup>みに入<sup>い</sup>れり

卷之三

山獨活のしげみのなかゆかへりみる沖の  
汐照ゆづきにけり



椿と牡丹

瓶の赤椿

つらつらに見れば椿の花の影うつるとも  
なくおのが葉の上になく

つやつやしみどり厚葉の椿の葉かぐろく  
光る椿の厚葉

咲き凝らす大きな椿の花ゆゑに部屋ぬちの  
夜は静まりにけり

隣部屋の時計の音のきこえつつ椿の花は  
いよいよ静けし

必ずや落ちてあらむと思ひつつ朝見れば  
椿は落ちてゐたり

いつぼんの雌蕊が残り椿の花すぼりと  
ぬけて落ちにけらしも

花瓶の肩をすべりて落ちぬらむ瓶のまは  
りの花一つ二つ

牡丹の花壇

おち散れる大きな花びらおのづから影持ち  
て居り真晝の土に

くろぐろと爛れ黒ずむ花びらをてのひら  
にのせつ晝深みかも

病 軀

六年十月九州旅行中扁桃腺炎にて福岡大學病院に入る

水枕みづまくらの水みづをすてたる窓まどの外そと夾竹桃けちうたうに花はなは  
あらざりき

眞晝間まひるまの長ながき廊下らうかをさしみつ病びやう人の車くるま  
押おされてゆけり

我わが咽喉のどを鏡かがみにうつして見みたりけり鶏頭けいとう  
の葉はの窓まどべの明あかり

となりの消毒室に夜おそくするどに湯氣  
のふく音するも

見つめゐし燈の消えぬれば部屋の壁あを  
じろくなり明けにけるかも

ふくみたる嗽ひの水の薄苦く今朝もとり  
されぬ熱のわびしさ

大阪に歸り腎臓炎を病む、翌年二月の末まで引籠りて

痛くも痒くもあらね動かれぬ仰向け臥し  
のいつまでならむ

朝床あさどによまねばならぬものにして新聞しんぶんを  
もて來くうるさきものを

あかあかと鶏頭けいとうに日ひのさせる見みゆねむり  
疲つかれの晝ひるふかみかも

さ庭にわべのこほろぎの聲こゑやや多おほしわれのゆ  
ふげの牛乳ちゅうにゅうを煮にる時とき

わが足あしの小窓こまどの下したの土つちの邊へにあまりまぢ  
かに蟲むし鳴なけるかも

こほろぎの細くするどき音にまじり何の  
蟲ども下聲に鳴く

何か言ふきこえてはあれどいらへねば又  
黙りにし妻のかなしも

獨りごちかと聞きてしあればちさき聲に  
うたうたひ居りかなしき我が妻

かなし妻大事らしく言ふめれどいづれに  
なりてもよき事ならむ

何事なにごとのあるかは知らねつぎつぎにこの家や  
のことの一日ひとひたえせぬ

冬ふゆ日びさすあかり障子しやうじのうちにして紅絹べにぬいの  
されなどとり散ちらけ居ゐり

ひらきすぎし牡丹ぼたんの花はなの縁ゆかり黒くろみしみじみ  
照てれる冬ふゆの日ひざしか

起おきあがりて朝食あさけの粥かゆをすすりたり木斛もくかく  
の葉はに欠ひしぶりの雨あめ



木斛はすこやかなる木雨にぬれてかぐる  
厚葉の光よろしも

床拂ひの朝

ひげ剃ると鏡の部屋にあぐらゐてあさの  
雲雀をほのに聞きつもの

初めて外出して

芝原の朝の霜けぶり向うから手をひいて  
来る子供が二人

うららかなや暖かや朝の日がひかり子供の  
頤の涎が流るる

公園の温室の花を見てかへりかろき疲れ  
のさびしくもあるか

梅雨のあとさき

毛蟲  
松毛蟲わが足もとの土の上にぼたりと落  
ちて大きなるかも

松まつにゐる大きな毛蟲けむしはたかれて土つちに落おつ  
ればすなはち這はひたり

土つちの上へに落おちてまろべばあらはなり大おほき  
毛蟲けむしの疣うぶの如ごとき足あし

土つちの上へに落おちてまろべる松毛蟲まつけむし赤あか黒くろき腹はら  
のうごいてゐるも

水無みづな月のゆふべの庭にはの土暑つちあつし掃はきあつめ  
たる毛蟲けむしを焼やくも

冬青の花

さ庭べの冬青の木の花少しづつたえずこ  
ぼれて静けくありけり

散りこぼれ日をへし冬青の花の上に今日  
ちりたるが真白くは見ゆ

土の上に冬青の花ちれり屈まりてつばら  
に見ればは小さな花かも

兵營移轉

とりこぼつ兵舎のほこり日ならべて夾竹  
桃の花に被れり

いづこにか馬舎の馬もつれゆかれ今日か  
ら何も居らぬなりけり

梅雨は降りうまやの柱一ならびこぼたれ  
のこる久しきあひだ

今日みれば兵舎のあとの土原もところど  
ころに樹ありて青葉す

近火の後

擔ひ來てはやけぼつくひを抛り出す空地  
のすみの爪紅の花

雨中

一ひとふりしてあがりし空そらをさらに重おもくさみ  
だれ雲くものかぶさり來くるも

庭にわの櫳かきのたけ低ひき木きの葉はごもりに雀すずめが鳴な  
きていまだ霽はれずも

こもりゐのゆふべの窓まどをあけたれば冬ふゆ青あお  
の花はな浮うくにはたづみかな

さみだれは止やむとは見みえねこのあさけ近ちか  
き野の原はらの雲くも雀すずめの聲こゑす

梅雨晴

梅雨ばれの晝の風ふけり  
裏畑の孔雀草の花  
しどろなるかも

何人かゝて箕を篩ふ音をりをりす  
桑の葉がくれ何人も見えずも

ふりやめばすなはち乾く土ぼこり  
夾竹桃のみどり厚葉に

夾竹桃くれなる深し熱風のちまたを人の  
群れつつ行くも

天神祭

生國魂も坐摩も過ぎぬるこの今日のお舟  
まつりは拜まねばならず

天神の夏越しの禊暮せまり川いちめんの  
にぎり浪かも

ゆふ篝おむかへ船の人形の腫晴れやかに  
かがやけるかも



ここまでも煙は纏れ川むかひ篝のなかの  
大篝燃ゆ

ほのぼのとひかり流るる篝ゆゑ船にゐる  
子の夏帯は見ゆ

漕ぎくだるどんどこ舟の鉦太鼓耳をつん  
びく音のよろしさ

うつくしくい群れて川を見るものか向う  
の二階の扇のひらめき

笹立<sup>ささたて</sup>てゆへるしめ繩<sup>なは</sup>しらじらと神輿<sup>かみこし</sup>の船<sup>ふね</sup>  
の今<sup>いま</sup>は見え來<sup>く</sup>る

神輿<sup>かみこし</sup>のあとさきの舟<sup>ふね</sup>にのりあふれ神輿<sup>かみこし</sup>か  
つぎのかくる掛聲<sup>かひこゑ</sup>

川<sup>かは</sup>光<sup>ひかり</sup>る篝<sup>かがり</sup>のなかを鉾<sup>ほこ</sup>流<sup>なが</sup>し今<sup>いま</sup>ははるかに行<sup>ゆ</sup>  
きたるならむ

稚き甥の死

六年十月甥の資雄修學旅行の歸りに不慮の大怪我して  
間もなく落命す、その知らせを聞きて

十日の間生きしかあはれ十日の間昏み睡  
りてしばしも覺めず

東京にかへらば今も玄關に走せても來ら  
む汝としおぼゆれ

又の年六月上京、牛込の家にて

この庭の泰山木を吹き折りし去年の暴風  
は資雄も聞きつ

この花のおほに明るうゆらめくなべ水無  
月曇りいよよ低しも

咲くからに泰山木は悲しかり  
黄に焼けて落つ

駒込吉祥寺

立ちつくせば木々のしづくのしたたりの  
まなくも音す墓原の中

追憶一首

栗飯を食うべに連れてゆきしかば食うべ  
足らひてのめき遊びつ

墓まゐり

姪杉山千代子の墓にまうでて

揖斐川の川そひ堤はてなくもい行きもと  
ほる枯芝を踏みて

川くまの荒草原をわけゆけば出水の泥の  
いまだ乾かず

愁ひつつわけゆく道は川くまのたまり水  
にし失せにけるかも

たまり水のまはりに楊しげみたりさびし  
き足のふみ處知らなく

赤坂山に登る

野に映る夕日遠ぞき我が目路の國のなか  
ばはかげるひにけり

低山のあかさか山に登り來しこの時の間  
に野はゆふべなり

下山して中仙道を行く

なにもものを見るとはあらね一人來て暗さ  
ゆふべの野づかさ立つ

斯<sup>か</sup>くしのみ見<sup>み</sup>れど夜<sup>よ</sup>空<sup>ぞら</sup>の伊<sup>い</sup>吹<sup>ふき</sup>嶺<sup>ね</sup>は心<sup>こころ</sup>あて  
にも見<sup>み</sup>えはせなくに

公園の夏

大阪天王寺公園

公園<sup>こうえん</sup>のいりくちにある病院<sup>びやういん</sup>の夾竹桃<sup>けちうとう</sup>も咲<sup>さ</sup>  
きにけるかな

乳母車を子供が押してはひり来るすずか  
けの樹の深緑かげ

公園の廣つばの土まぶしかり向うに紅き  
夾竹桃の花

一列の空椅子の上にとぼれたる夾竹桃の  
花の塵かな

撒水車の通るあとから乾きゆく夾竹桃の  
花の塵かな



椅子の上の男の寐息いぎたなし照る日ざ  
かりの夾竹桃の花

椅子の上に新聞を敷いてすわる時しみじ  
み紅し夾竹桃の花

廣つばの温室の硝子あかあかと夏の夕日  
を照りかへし燃ゆ

ほのかなるベンチの人の煙草の火大藤棚  
の蔭の暗さに

瓦<sup>が</sup>斯<sup>す</sup>の燈<sup>ひ</sup>が夾<sup>は</sup>竹<sup>ち</sup>桃<sup>たう</sup>に照<sup>て</sup>りゐたり其<sup>そ</sup>處<sup>こ</sup>過<sup>す</sup>ぎ  
てまた暗<sup>くら</sup>くなりぬる

夏<sup>なつ</sup>の夜<sup>よ</sup>を白<sup>しろ</sup>き小<sup>こ</sup>犬<sup>いぬ</sup>をつれきたり遊<sup>あそ</sup>ばせて  
ゐる芝<sup>しば</sup>生<sup>せい</sup>のうへに

住吉公園  
公園<sup>こう</sup>の棕<sup>せき</sup>の大<sup>おほ</sup>木<sup>き</sup>はつぶつと黒<sup>くろ</sup>き實<sup>み</sup>つけ  
て夏<sup>なつ</sup>闌<sup>らん</sup>けにけり

この池<sup>いけ</sup>に睡<sup>す</sup>蓮<sup>れん</sup>咲<sup>あ</sup>けりまはり道<sup>みち</sup>の少<sup>すこ</sup>しのこ  
とを人<sup>ひと</sup>は來<sup>こ</sup>ぬかも

暴風

このねぬるあさけの空の雲脚に大きあら  
しの風さきは見ゆ

ただならぬ空のけしきとなりけりゆき  
ちがひ走る下の雲上の雲

はるか上の雲はうすらに光りたりかげろ  
ひ走る下の雲かも

二階から見てゐる空を雲は低くひたすら  
低く走りゆくなり

風空を動いて雲のゆきければあとよりあ  
とより押し簇り來

あらし來と晝暗く戸をたてたれば縁側の  
すみに鳴ける鈴蟲

雲ぎれして一ところ見えし青き空見てゐ  
るうちにひろがりゆくも

山海經  
終

「伎藝天」以後の製作が七百首ほどになつたので、新しい集の編纂にとり掛つても輕率ではあるまいといふ自信が出来た。今その中から三百二十五首を自選して「山海經」の内容としたのである。

この歌集の内容の排列方法も、私の過去の二つの歌集と同じやうに、製作年月の順序に依らないで歌の種類に差別に従つた。すなはち近畿古寺巡禮の歌を卷之一に、

その他の旅行の歌を卷之二に、四季雜の歌を卷之三に收めた。これ等の歌の製作期間は「伎藝天」の稿本を書き了つた大正六年晩秋の某日から最近までの、言ひ換へれば私の三十六歳の十月から四十歳の十月までの、四箇年である。

この度の集と「陽炎」又は「伎藝天」とをざつと比べても自覺するのは、感傷の響の著しく低くなつた事、對

象その物の印象を直叙しようとして努めて來てゐる事、言葉の選擇の範圍が廣くなつた事、私の過去に試みられたことの無かつた連作體のものがこの度の集には數篇ある事、あくどい色の花や強烈な日光を取扱つた歌の多い事等である。この最後に擧げた事を、暑中以外に餘暇を持たない私の生活上の境遇の爲めだとは思ひ度くない。私はいま生命の夏の眞盛りに居る。おのづから夏の歌ひ手に成

つてゐるのだと考へ度い。春には春、夏には力、冬には終りのしづけさ有れとは、私の歌及び生命の上に於ける希求である。間違ひだらけの如く見える私の歌も生命も實際は大凡この希求に合致して歩んで來てゐる事を、上天にむかつて感謝せずには居られない。

「山海經」といふのは元來支那の古書の名稱であつて、畢沅といふ人の「新校正序」の冒頭に山海經作於禹益述

於周秦其學行於漢明於晋而知之者魏酈道元也云々と書いてある。その地理博物の觀念の頗る閑誕迂誇なる事が私の歌の不確かな自然描寫に似通つてゐるのでその名稱を借りたのだとも言はうか。そんなこじつけを言ふ必要は無い。私は「山海經」といふ文字の持味が好きなのだ。好きだから借りた。それでいゝ。それから、この名稱は既に北原白秋氏歌集「雲母集」の中の一篇の題目となつ

てゐるので、同氏にも御ことわりして使用した次第なのだ。

この集を出版するに就いて詞友尾山篤二郎君及び東雲堂西村陽吉君の御骨折にあづかつた事は一通りでない。又歌の字句の推敲に當つて恩師佐々木信綱博士、先輩窪田空穂氏、詞友植松壽樹君達から有益な助言を頂いた事も尠くは無かつた。これ等の方々に厚く御禮申し上げる。

装幀に就いては京都の洋畫家船川未乾君に非常な御厄介をかけた。原畫は藝術的の匂ひの高いものであつたが、版にしてはその趣致の半分も表れなかつた事を同君の爲めにも御氣の毒に思ふ。

大正十年十一月

著者しるす



大正十年十二月二十日印刷  
大正十一年一月一日發行

【定價金貳圓】

山海經奧附

著者 川田 順

發行者 西村辰五郎

印刷所 民友社

發行所

東京市日本橋區檜物町九番地  
振替口座東京五六一四番

東雲堂書店

電話本局一八七一番

東京市日本橋區檜物町九番地

東京市京橋區日吉町十番地

川田順歌集目錄

第一集

陽炎

船川未乾裝幀

著者青春時代の記念的作物にして、明治三十二年頃より四十一年初夏に至る間の歌凡二百八十首を収む。

東京市日本橋區本石町一 竹柏會出版部發行  
東京市神田區表神保町 東京堂書店元賣捌  
定價壹圓五十錢 送料 六錢

第二集

伎藝天(五版)

有島生馬裝幀

明治四十一年夏より大正六年暮秋までの作凡二百六十首を収む。

東京市日本橋區本石町一 竹柏會出版部發行  
東京市神田區表神保町 東京堂書店元賣捌  
定價壹圓貳拾錢 送料 六錢

第三集

山海經(新刊)

船川未乾裝幀

「伎藝天」以降大正十年十月までの製作三百二十五首を収む。

東京市日本橋區檜物町 東雲堂書店發行  
定價貳圓 送料 六錢